



森本信吾さん

(社会福祉法人近江順和会 特別養護老人ホームヴィラ
十二坊／小規模特別養護老人ホーム百伝の杜 施設長)

京都府生まれ。大学時代は、山登りが好きで、アルバイトで貯めたお金で、海外(アジア圏)に行き、主に、山登り(トレッキング)など様々な環境に出向いて過ごしておられました。卒業後は、土木業の仕事をされる中で、知り合いからのお声かけで、児童養護施設にてボランティアをされ、そこから福祉のお仕事をするようになった。ご自身の福祉に関わる目標として「ゆりかごから墓場まで」をテーマに、児童分野、障害者分野、高齢分野と、様々な分野、職種をご経験してこられました。現在は、特別養護老人ホームヴィラ十二坊の施設長をしております。

福祉業界に繋がるきっかけ

山本 事前にホームページを見させていただいたのですが、平成二〇年四月に開設された当初から施設長を務めておられるんですか？

森本 そうですね。準備室が、同じ法人の美松苑(①)という施設にあっただけですけれど、平成一八年から勤めまして、その前は、八起会という法人で働いてたんです。今常務理事をされている方が、当時美松苑の苑長に就任されていて、ここを建てるのが決まったからということ、声をかけてもらったんです。

山本 八起会で勤められていた時は、どのような仕事をされていたんですか？

森本 元々は、現場の介護職をやったので、デイサービスセンターをかわきりに、八起会も複数の施設(職務)を異動していました。この仕事自体は、一八年目になるんですけど、管理職の方が長いです。八起会にあぼしという特養があるんですけど、その準備室から立ち上げをやって、またこちらの方でお世話になってという流れですね。

山本 その美松苑の苑長さんとのつながりってというのは？
森本 僕が、八起会に勤め始めてから、八起会の方で、確かケアハウスの施設長に就任をされて、そこからのつながり

りですね。

山本 なるほど。その以前は、また別のお仕事をされていたんですか？

森本 そうですね。その前が、栗東の作業所で、パレットミル(②)というところの立ち上げをするからというので、声をかけてもらって、そこに二年弱いましたね。

山本 では、社会人になられて初めてお勤めになったのが、パレットミルだったんですか？

森本 いや、まだ前があつて、児童養護施設の旧甲賀学園、現在の鹿深の家(③)で五年半くらい働いて、その前が土建屋さんで働いてましたね。

山本 あつ、土建屋さんから福祉の方に？

森本 その土建屋で働いている時に、社協で働いている方と知り合いで、ボランティアで甲賀学園に月一回行くグループがあつて、当時の園長から一回働かへんかって声をかけていただいたんです。まあ元々福祉に興味があつたっちゃあつたんで。話は変わりますが、うちの奥さんが、近江学園で働いているんです。養護施設で働いている時やつたんですけど、結婚して近江学園の官舎に入って、知的障害のある人達が、僕の日常の中にはるようになるわけで、そんな兼ね合いもあつたりして。

山本 官舎の方には、どれくらい住まれていたんですか？

森本 六年くらいいてたんちゃうかなと思うんですけどね。

山本 その時のお仕事としては？

森本 養護施設で勤めている時に結婚して、そのまま官舎に入ったので、そこからパレットミル、八起会に勤めた時も、まだ居てましたので。溝口さん(④)とかと知り合ったのも、養護施設に居る時なので、二〇年以上の付き合いになるんです。でも、僕、糸賀さんのことを全然知らなくて、間接的に知ったんです。あと、田村先生の晩年になるんですけど、奥さんと一緒によく散歩して学園の方に来てはって、で、うちの子ともと散歩して道端で会って、話をしたりはしましたね。

山本 直接、田村先生とも会われて、言葉を交わされたという事ですね。

森本 ほんまに日常会話なんでね。「先生どういう取り組みされてきたんですか？」みたいな会話は全然なかったですね。

山本 割と、周囲の方から、糸賀先生や田村先生の取り組みを聞く感じだったんですか？

森本 ちらちら聞くという感じでしたね。

学生時代の海外での経験

山本 話が少し戻るんですけど、ボランティアに行かれていた時から、福祉にも少し興味があったということでしたか……。

森本 うーん。当時、福祉の業界に対して、アクセスする術がなかったというか。大学が、佛教大学の通信教育で、色々なバイトをずっとやっていて、山が好きだったので、お金を貯めてネパールにトレッキングに三ヶ月行ったりと、そんなんしたりしてたんです。当時、不登校の子らが通うフリースクールがちよっと出てきた頃であったりとか、海外に実際に行ってみると、貧民窟みたいなのがあったり、ネパールやったらチベット難民キャンプがあったり、日本人でもボランティアしてる人もいて、まだ二代の前半だったので、感性が刺激されたりして、海外に出てなかったらカルチャーショックも受けてないのですね。

山本 海外に出られての経験が結構大きかったりするんで

①美松苑……社会福祉法人近江和順会の特別養護老人ホーム。

②パレットミル……現在の、社会福祉法人パレット・ミル。主に、障害のある方の就労支援を行ってられます。その他にも、特定相談支援事業の運営もされています。

③鹿深の家(旧甲賀学園)……現在は、社会福祉法人甲賀学園鹿深の家。児童養護施設と、地域小規模児童施設を運営している法人です。

④溝口さん……溝口弘氏。株式会社なんてん共働サービズ取締役会長。

すか？

森本 今振り返ると、ベースかなとは思いますが。当時は、そんなこと考えないですけど、バブル前やったんで、その中で自分自身が適応できるかどうかすらわからへんみたいなね（笑）。とりあえず、働かなあかんから、卒業して就職したのがバイトもしたことある土建屋さんやったんですけどね。

山本 大学では、福祉の勉強をされてたんですか？

森本 福祉は直接関係なかったんですけど、僕の卒論のテーマが、「住民参加の町づくり」みたいななんやったんです。山本 なるほど。その辺りに興味を抱き始められたのっていつ頃だったんですか？

森本 やっぱり海外に行ってから違いますかね。ヨーロッパと日本では全然違うなど。ヨーロッパだと、村で自治権があつて、自分たちの日常の事は自分たちで作っていくんやみたいな意識があつて、日本人はなんでそんなんないんやろなつて、漠然としたことだけで、全然深くは考えたりしてなかったんですけどね。

福祉に携わり始めて

山本 鹿深の家が福祉に携わられた一番最初ですか？

森本 まあ福祉業界の入り口ですね。二六、二七歳の時に、児童指導員でしたね。

山本 子どもたちと寝食も共にされていたんですか？

森本 そうですね。今はどうかかわらないですけど、住み込みでしたね。自分の与えられた部屋から一步出たら職場という昔の形態ですよ。どこの職場も就業規則はあるんですけど、結局休憩時間でも休みでも二四時間三六五日なんで、関係ないんですよ。でも、いい経験をさせてもらったとは思っています。当時、気持ちは前へ前へいくので、子ども達を上手く説得できなかったり、納得させられないということも当然ありましたし。養護施設は、色んな家庭環境で育ってきた二歳から一八歳の子たちがいるので、結構幅もあつて、そこで自分が親になる練習をさせてもらつたと思つてますね。

山本 その時の印象に残っているエピソードはありますか？

森本 エピソードは、ありすぎて困るんですけど（笑）。そこで働いていた時に思っていたのは、将来はファミリーグループホーム⑤をしたいなとか思つて。グループホームという言葉の発祥はイギリスで、児童から始まるんです。それで、イギリスに旅行に行つて、その発祥の地に行つたりだともしましたね。それと直接福祉とは関係

ないんですけど、養護施設が県内に複数ある中で、労働環境の改善をということで、養護施設の労働組合の連合会が当時出来て、その会長というか委員長にされてしまったんですよ（笑）。二年程しかやってなかったと思いますけど、その兼ね合いで労働組合の予算を使って、滋賀県で勉強会をしましょうっていうので、自治労って団体に入ってたんですが、その自治労の松山さんっていう方が……。

大平 あっ、松山さん、お知り合いなんですね。

森本 まああの人が、僕の師匠みたいな存在ですわ。で、松山さん繋がりで溝口さんを紹介してもらったりとか。それを理解してくださる先輩方が周りにいらっしやって、結構団塊の世代の人に可愛がってもらってたんです。そういうことが一番大きかったかなということですね。

山本 そうなんですね。鹿深の家をお辞めになって、その次はパレットミルへ行かれたんですか？

森本 そうですね。子どもに関わりのあることをやりたかったのがあって、実際鹿深の家に勤めて、その後にパレットミルに行く事になるんです。障害のある方が通う作業所とか施設については、全く法律的な事とか知らなくて、で

もそれはそれでいい勉強になったかなって思いますね。パレットミルで、初めてフォークリフトを使うことになったんです。日曜大工程度はしたことあったんですけど、本格的な木工機械を使って、実際パレットの修復をしたり、ベンチを作ったりね。無認可やったんで工賃やないですけど、きちんとした給料を払えるような状態ではなかったの、その中で障害のある人たちが、汗流して一生懸命働かざる姿っていうのは、一緒にやらせてもらう中で印象的でしたね。

山本 その時の、利用者さんとの関わりとかは？

森本 甲賀にいた時と一緒に、何でこれがわからへんの、何でできひんのかとか、お前これ仕事やろみたいなのがしょっちゅうありましたね。

山本 そうなんですか。本気でぶつかりあって、みたいなことですか？

森本 若かっただけですけどね（笑）。今振り返ると、言葉にして相手の方にきちんと説明する能力がなかったと思います。今すぐ言っても解決しないことを、自分が無理強いらしてたんとか、発達障害のある方でしたら、無理なも

⑤ファミリーグループホーム……「ファミリーホーム」は、家庭環境を失った子どもを里親や児童養護施設職員など経験豊かな養育者がその家庭に迎え入れて養育する「家庭養護」です。

のは無理じゃないですか。そしたら特性を活かすとか、伸ばすとかいうふうに考えられへんかったのかなとかね。

山本 後々振り返ると……。

森本 自分にそういう技術もなかったし、知識もなかったし、それこそ臨床経験もなかったもので、というふうに思いますね。

山本 その気づきのきっかけみたいなものはあったんですか？

森本 一つは、いろんな方と出会って、いろんな話を伺ってとか、奥さんが近江学園で働いているというのもあって、その関係の図書を読んだりとか、あとは、自分の子どもが生まれて、子育てを一緒にしていく中でとかになるんですかね。それと、自分の福祉に関してのテーマが「ゆりかごから墓場まで」やったので、子どもが生まれた時の立ち会いにも行ってるんです。その頃作業所で働いてたので日勤帯で、子どもの小さい頃は、過ぎす時間は僕の方が長かったんですよ。それで、今この施設でターミナルケアをやっているのです、最期の看取りまでなので、一応目標というのか、目的は達成したんです。

山本 自身で子育てをされる中で、気づいていくという感じ……。

森本 はい。虐待って、虐待した人が悪いって思いますよ

ね。当時、ずっとそう思っていたんです。でも、親御さんは親御さんで悩みがあったんやろなとかね。そういうふうには振り返れるようになったっていうのは、自分が子育てをしながらでしょうね。たぶん。

高齢分野に関わるようになって……

山本 八起会では、高齢の方との関わりになるわけですが……。

森本 高齢者介護っていうのは、自分には出来ひんって思ってたんですよ。要介護状態のお年寄りのイメージが、おっかなびっくりで触らなあかんような、骨ももろくなってるとかね。となると、自分には絶対に出来ひんのかなとか思ってたんです。それで、なぜパレットミルを辞めたかと言いますと、無認可の作業所やったんで、収入が少ない。それで、土日祝日にバザーとかに出たりするので、自分の家庭、子育てにね、支障をきたして、ある日奥さんに、正座して座らされて、懇々とお説教されて（笑）。仕事やったら仕事にのめり込むタイプやったんでね。

山本 なるほど。そこを奥さんが、軌道修正というのか……。

森本 はい、されましたね（笑）。それで、家から近いと

ここで、働けるとこないかなって調べたら、八起会やったら

五分、一〇分くらいの距離なんですよ。たまたまその時の、

デイサービスの所長が以前に一、二回お会いしたことある人だったので連絡とって、「非常勤職員やったら四月から来てもらったらいいよ」という事で、そこからお世話になりましたね。高齢者介護をやるにあたって、何かテーマがないと自分の中で続かへんと思ったので、恰好よく言うと、自分の親を介護するにあたって、自分の親を入れたい施設づくりというのを、自分の中ではテーマにしてたんです。それで、一からのスタートで、八起会に入った時が、三五歳くらいなので、だんだん物覚えも悪くなってくる中で、とにかく慣れることに必死でしたね。仕事を覚えないと、上司にこれおかしいですとかも言えないですからね。

山本 実際にやってみられてからは、どうでしたか？

森本 そうですね。やってみる中で、例えば、脳梗塞で片麻痺があつて腕が硬縮するとか、お風呂の介助とか、排泄の介助とかの時に、触らせてもらうじゃないですか。そんな中で、認知症でよくありますけど、手続き記憶やないですけど、この方にはどのくらいの加減がいいかとか、どうしたら痛いんやとかいうのが、一つずつ身に付いてきたんでしょうね。やから、現場に身を置きながら、学習していくというのが一番覚えやすかったのかなと思いますね。

大切にしている事

山本 長く高齢の分野に携わる中で、ターミナルケアを始めたのは、ここが開所されてからになるんですか？

森本 八起会が八年、今のところが一〇年くらいになるんですけど、あほしからやっただんです。元々あほしの立ち上げを八起会でした時に、僕、副施設長をやってたんです。その時の施設長が、元々看護師の方で、ターミナルケアをやりたいってことをおっしゃられていたので、あほしの時からターミナルケアはしてたんです。

山本 そうだったんですね。その中で、大事にされているのはどういった事でしょうか？

森本 「その人らしい暮らしの支援」っていうテーマで、ターミナルケアでもご本人やご家族の選択で、施設はご本人とご家族を縁の下から支えるっていう感じですかね。また、施設長という立場なので、それはそれで役割があると思っているんです。一方で、個人的には、現場に片足突っ込んだりしたいなっていう思いもあって、そこで行きつ戻りつみたいなのが、ここ八年の間くらいありましたね。ただ、一昨年くらいからは、自分も五〇代になったので、育成にシフトを。それまでも全然してないということではなかったんですけどね。例えば、中間管理職としてきちんとして

でもらわなあかん事があって、自分が考えて口出した方が早いことってありますよね。人に任せて確認しなあかんてなったら、時間かかるし、正確さもあやふやになる。でも、そこは任せていかないと、その人の経験にならへんと思って、徐々に任すようになって現場からは少し距離が出たかなと思ってます。

山本 なるほど。ホームページに、利用者の方も大事ですけど、職員さんの自己実現も支えていきたいというような事が書かれてあったのにもつながるような……。

森本 僕、やっぱり利用者満足が一番やとは思ってますよ。次に職員が来て、その後施設とか、法人とかが来ると思うんです。法人の役割は、地域の中で展開していくとか、地域のニーズに応えていくとかあるとは思ってますけどね。極端な話をすると、自分を介護してもらおうような、あるいは、この地域を支える人材を作らなあかんわけですよ。となると、しっかりしてないと、風土とか文化みたいなもんが五年、一〇年やっていると出来てくると思うんです。ほんで、今は何となくはありますけど、僕がもし退職したりとか、法人内で異動して誰か別の方が施設長にならしたら、それは継続するのかとか、というのは思ったりもしてるんです。単に、僕の個人技じゃなくて、組織全体で、風土とか文化が継承されていったらいいなと思って

たんです。そしたら、自分がいちいち現場に入って、口出しするんじゃないかって、自分の頭で考えて、発言して行動できる、且それに責任まで取れる人材を作れたら、一番いいなと思ってますね。職員に言う時には「あなた、どこに行っても通用する人材になってね」みたいな、他の施設に行っても動けるのはもちろんのことなんですけど、例えば東北で震災があった時に、ボランティアで行ったとしても、知らん人同士が顔を合わせて、そこで戦力になるような人材の育成の仕方がほんまもんやと思ってるんですよ。

山本 なるほど。

森本 どうしたらいいかは、まだわかってないですけど……、ほんまもんの人になってもらいたいと思うところで、今僕の中のテーマは、職員の確保、育成ですね。

覚悟と、次世代につないでいく

山本 いろいろとおうかがいしてきたんですが、次世代を担う方々へのメッセージと言いますか、こういうことを託したいということがあれば……。

森本 メッセージというか、育成は育成なんですけど、人も資源やと思ってるんですよ。何かしら、うちの職員を見てても、二〇歳から七〇歳くらいまでの方が働いてくれ

てはるんです。その人の能力の開発やないんですけど、良いところをこちらが見出して「じゃあ、こういうふうによつてもらえませんか」とか言っていると、たぶんその人に光が当たるといふか、そのことを周りの人も認めたりするんちゃうかなと思ってますね。あと、僕、ここの施設長なった時に、理事長から言われたのは、管理者っていうのは、休みであろうが、管理者ですよ、やから、二四時間三六五日、お前は拘束されるんやでということと、何が起ころうが責任を取る覚悟を持つように言われました。例えば、重大な事故が起きたとすると、いつも来てくれてるご家族やと、ご本人の状態とか、よく見てはるんですけど、極端な話で言うと、一年に一回も来はらへん預けっぱなしの家族さんもあるんです。そしたら「こんなになつてしもて」みたいな。そんだけ家族さんとの繋がりが薄いんですよ、それだけ来はらへんと。よう来てくれはる人は、もし大きな事故があった場合も、こちらのミスはこちらのミスとして、ちゃんとと言うようにしてるし、逆に、その方がうろろうしてはつて転倒されたというのは、生活上のリスクっていうことになるんです。それは、どこで暮らされてても、一緒なんですよね。ご本人とか、ご家族さんと利用契約する時に、これはできますけど、これはできませんというようなことは予め伝えてても、使う方としては、預けてたのにみたいな

ことになつてしまふんですよ。そういう時も、えらく怒られることはあつても、命までは、取られないですよ。こちらでも誠心誠意、きちつと説明して謝罪するしかないで、そういう事はしますけど、自分の役割を果たしていきたいというところですね。ほんで、理事長が最後の最後の責任は自分が取るからと、やっぱり言わはるんで。そして、その前の段階で、理事長とか、常務理事とかの顔に泥を塗るような真似はしたくないと思つてるので、そういう腹の括り方をしてますね。

山本 今日、今日は、幅広くいろいろなお話しをしていただき、ありがとうございます。

大平 直接的に糸賀先生たちから影響を受けられた方もいれば、そうでない方もいるということは僕たちも理解して、でも何かそこに、繋がりがあるといふか、直接的じゃなくても繋がりがあつたり、一緒に語らせてもらうことで、糸賀先生のことでもよく理解できるのだと思ひますし、今日は良いお話をたくさん聞かせていただきました。